

ボーイスカウト東京第四団

機 関 紙

No. 92

JUN. 28, 1969



年少隊創立十五周年に際して

ボーイスカウト日本連盟

相談役 小崎道雄

靈南坂のカブスカウトが創立十五周年を迎えたこと誠に感慨である。戦争の激しい物心両面の変動の中で教会が御恵みによりよき指導者と与えられ、当時の実情として熱心なクリスチャン青年ウィリアム君が親切に万事を世話して呉れたことはありがたいことであった。同君は帰国後も種々、通信により今は先輩の今田、飯田、小崎忠雄に指導を与えられた。私も一九五四年、親しくニューヨークで同君と面談、科学者としての同君の健在を知った。

元来スカウトは聖書による奉仕の精神とその実践により青少年を「神を畏敬し人類を愛する」人間として自然界の現象観察を通して体得せしむるのが根本の理念であり、目的である。従って教会を理解し、信仰により主の御旨を実践する信徒を中心として発展するのが最も理想的である。

英国のスカウトが七〇パーセント教会の支持で行われて居るのもそのためである。

日本は教会人口が僅かに総人口の十パーセントもない異教の国である。従って教会はスカウトを支持後援するよりはむしろその内容に於て真のスカウトの模範を示すべき使命がある。

十五年を経た靈南坂スカウトはこの根本たる福音の実践としてのスカウトはかくあるべしと謙遜に反省する時でもある。この機会に新しい団長を迎えたスカウトが世界の多くのスカウトと共に健全なる発展と内容の充実を期待するものである。

おめでとう

カブスカウト

正 夢

遠山兼宏

四団のカブスカウトが、この六月に十五回目のお誕生日を迎えることになりました。なにげなくすぎさった十五年、その間にカブスカウトとして、或いはリーダーとして過ごされた皆様方の中には限らない思い出が広がって行くことでしょう。初めての舎営で心細かったこと、愉快なゲーム、リュックが重くて、それでもがんばって歩いたこと、緊張した入隊式、初めての制服、そして絶えず努力され、ここに十五の足跡を築きあげてきました。現在、元氣いっぱいにかビングにはげんでいるスカウト達が、その上に更に新しい足跡をつけようとしています。その時代々々によってカビングに対する考え方、方法論は異なっていますが、四団のカブスカウトはこれからは先輩の足跡を土台として一歩一歩確実に歩んで行くことでしょう。

ガンバレノ カブスカウト

" リーン リーン "

" モシモシ "

" スギハラデス。ゴブサタ。ゲンキデスカ。 "

" ウン、ドウヤラ、キミハ？ アイカワラズイソガシソウダナ。 "

" "

" イイミセミツケタカラドウダイヒサシブルニ、コンヤデモ "

" OK!! "

(浅草寺境内近くのある店)

" 本当に変わった店だな "

" "

" ところで、オレ結婚しようと思うんだ。 "

" 本当かよ!! "

" ウン "

" そうか、それは良かった。詳しいことはともかく乾杯だ。 "

" おめでとう!! "

" ありがとう。 "

" 相手は..... " "

" いつ頃..... " "

" ICUでやるのか..... " "

" どんな風に..... " "

" " "

" " "

" よし!! 手伝うぞ。何でも言っておくれ "

" よろしく頼むぞ "

" OK " "

" " と言うような次第で新郎はスカウティングに大いなる情熱を傾ける立派な青年であります。新婦〇〇さんは、昭和××年×月×日△△にて生を受け.....を優秀な成績にて卒業され、言い古されている言葉ですが「才媛」という言葉が正にピッタリの女性で、やさしく理解はあるが、反面大変むずかしそうな新郎を助けるに、最もふさわしい方であると確信しております.....

" ムニヤムニヤ "

" 七時ですよ!! 起きて下さい。 "

" ウーン、夢か "

夢にまで見る杉原正君との親交。二十年余。この夢、正夢ならん事を祈って!!

原稿をお願いしたのは四月の中頃、二回の電話の後「どうしてあなたは書かないの」と言う奥様のはげまし?の声で、六月のはじめにやっとこの原稿を頂くことができました。

カブスカウト

少年隊 河内 博

ぼくは、リス、ウサギ、シカ、クマと、四年間カブスカウトの仕事をしてきたが、その中でいろいろなけいけんをした。その第一は舎営である。カブスカウトになって初めて舎営に行った時、いちばん最初の日に家がこいしくてたまらなくなった。しかし、組の人がみんな楽しそうなのでぼくもつられて楽しくなってきた。それで帰る日には、帰るのがいやになったほどである。

その時はデンマザーもデンチーフも組長もみんな遊んでくれたが、今のカブスカウトを見ていると、そうとは思えない。たとえは、組長が組員に「何をしろ」と命令的に言う。組員は「はい、はい」と言っ、言うことを聞いているだけだ。こんなことは組の中がみだれるのが当然のようにぼくは考えられる。それに組員はデンマザーやデンチーフの言うことを聞く時は聞かなければならぬのにバカにしてしまつてろくに聞かない。そういうのも組長がとめなければならぬのに組長もやってしまつてゐる。これでは、まじめにしっかりやろうと思つてゐるスカウトがかわいそうだ。それ

をおしてゆくには特にデンチーフががんばらなければならないのではないだろうか。それにデンマザーがお母様になつたのでデンチーフがもっとカブスカウトの先をリードしていかなければならないのではないだろうか。

ぼくが考えてゐるのは、スカウトが毎日毎日カブスカウトに来たがるようなカブスカウトを築き上げていきたいと思う。

十五年目の足跡

年少隊副長補 松田武明

刻々と流れる歴史の中で、四団の年少隊は十五回目の誕生日を迎えた。流れ行く歴史はそのとどまる所を知らない。時にははげしく、時にはゆるやかに、その流れも一様でない。わずかに十五年の間にも、その環境、ものの考え方などはいちじるしく変化した。すなわち、十五年前の考え方では、もう通用しない点が多分にあるのである。

しかし、十五年間変わらないこともある。それは、この四団において第一歩目の足跡を残したスカウトも、十歩目の足跡を残したスカウトも、そして十五歩目の足跡をつけようとしてゐるスカウトも、みんながみんな、スカウト活動を通して、よりよき人

間となるために——激しい歴史の流れの中で、その流れに押し流されることなく、自分の目で見て、自分の耳で聞き、自分の頭で判断する。そういう人間になるために、訓練を積んで来た。又今、その訓練を受けているということである。スカウトは、いや、全ての人間は、その時代に合ったもの考え方、行動をしなくてはならない。

その観点から、日連はカビンギに新風を吹きこんだのだと思う。現状のカビンギに即した制度を、ということでは以前から「カブ委員会」なるものを設けて検討してきたらしい。そしてその新制度がこの四月から実施されている。その主なものは、スカウトにやる気を起こさせる自発性の促進（進歩制度）、地域社会との関連、両親の参加などである。その新制度の善し悪しはまだわからない。ただそれによつてスカウトがやる気を起こし、より楽しいカビンギを行なえるというのだから、その通りになればこれは喜ぶべきことである。しかし、わたし個人としては、この新制度にまったく疑問がないわけではないが、よりよい結果をもたらすために努力することがリーダーとしての役目だと思ふ。

新制度になつたことによつて、十六歩目

の足跡からは今までのものとは違ったものになるかもしれない。——いや、むしろ違うことを望む。すこしでも以前の足跡よりは大きく、そしてりっぱなものになることを。大きくならう。りっぱな足跡を残そう。そしていつも大きな声で叫んでみよう。
「いつも元氣」

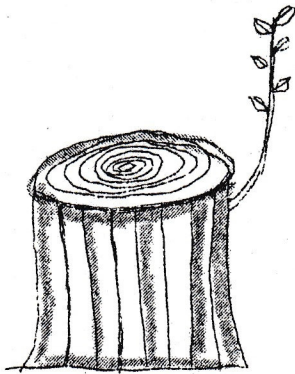
デンマザーになつて

西 家 美 子

童心にかえつてと張切つてスタートした私達。「貴女ぎっくり腰大丈夫!!」「貴女今日は鍼、灸」と飛び出す会話。互いに助け合ひの標語の如く和氣霽々の四人でございませぬ。隊長はじめ各リーダー、デンチーフにおんぶし、スカウト達に手を引かれ今日まで何とか歩んで参りました。

「デンマ、今日は」と可愛い二本指で敬礼され、一瞬ハッと胸を打たれます。天真爛漫なスカウト達に囲まれ、お祈り、合唱、ゲームと時のたつのも忘れてしまいます。

「天にましますわれらの父よ、ねがわくば……………」夕餉のひととき子供に「ママ、これあげるよ」と手渡された一枚のカード



「主の祈り」。思わず難うと頭が下がる。スカウト歌集を持ち出し、「この歌知ってる?」と姉弟で合唱、「ママ、後からついて歌って」とにぎやかなこまです。来る十五周年記念行事、夏季キャンプ、盛り沢山なスケジュールに一日一日と近づいて参ります。

万全を期してと思いつつも、視野の狭い私故、手ばかりな事ばかりで申し訳けません。どうか御気附きの点等、よろしく御指導の程お願い申し上げます。

僕 は 今

少年隊副長 辻 啓 一

副長補から副長になったので「スマイル」の編集員を止めさせてもらい、シメシメと思っていたら早速「外から見たカブの改革」という題の原稿を書けと言われて了った。同じBS系のリーダーでありながらカブの改革なんぞということについては団会議でもらったパンフレットを一冊読んだ位のことしか知らず、外見的にはデンマザーが御母様方に変わつたのを見て、自分がカブの頃は美人のデンマザーに憧れたものなのに、今のカブはたとえ美人であるにせよ他人のオフクロをデンマザーにせにゃならんとはかわいそうだわいといささか不謹慎な感想を持つただけである。そのうち勉強するから題を変えろと編集長に抗議をし、やっと好きな事を書いて宣しいという許可をもらった。

それで近頃の心境でも書いてみようと思ふ。何もかも退屈で、気が滅入りっぱなしというのが現状——といつても今はまた少し変わってきたが基本的には—である。去年の秋頃は「人間生まれたいと思つて生ま

報 告

れる訳ではなし、気がついた時はすでに生まれて了っているのだから、生まれながらの人生の目的等というものはある筈がない。しかしある一定の年令に達し、自覚をしてくると何も目的なしに生活することに苦痛、不安を感じて何か目的を求めようになる。『我が人生の目的は——』なんぞと云っている連中だつてその不安からの逃避にすぎんじやないか』と思つていた。そして自分でも不安を感じていたが、生来の怠け者であるので別に必死になつて目的を求めたでもなく、だからだと暮し、そのうちモーパッサン等にこりだしたら、今度は妙にペンミスティックになり、受情だの友情だのと云うけれど、自分の生活の極く極く限られた一部でしか接していない人間同志が完全に理解しあう等ということはあり得ないし、言葉を使つてしかコミュニケーションができない以上理解しあつていゝと思つたところで、それは完全に誤解しあつてゐる状態かもしれない。男女の愛情に於いて互いに等しい愛情を持つてゐると思つていても、片方の愛ともう一方の愛のその内容が一致している保障などどこにもない。高橋和巳の本にどんな男女の愛情も結局は抱擁によつてしか表現できないとあるのを

読んだことがあるけれど、その抱擁でさえ心理学の本によれば男女のそのことに対する考え方に大分開きがある。だから恋愛だつて面白くもない（このへんにはもてないヒガミがあるかもね）と思うようになった。何もかも虚しいと思つた。しかしここに実は非常な甘えがあつた。虚しいと思うと同時に、そうあつて欲しくない、本当はそうあるべきではないという気持があつた。しかし、人間がしたり、感じたりすることは、人間を離れた「かくあるべし」とか、「かく思うべし」とかいうものがある訳ではない、完全な理解とかコミュニケーションとかいうものはないのが当然で、どうにもならない位孤独と感じるからこそ、何かフトした機会に幻想にしかすぎないかもしれない友情という様なものを具体的なもののように感じた時それが非常に貴重なものに思えるのだろう。愛情に於いてその途上で錯覚に捕われて了うことはあるだろうけれど、根本にはどうにもならない孤独な人間同志という認識があつてこそ、それが優しいものになるのだと思う。枚数の関係で退屈云々については書けなくなつて了つたし、説明も下手で不充分で残念だ。機会があつたら続きをそのうち書きたい。

|| 父兄総会 || 三月二二日 (土)

一、新団委員決定

一、決算報告

|| 団会議 || 四月十四日 出席者十九名

一、新団委員長決定

一、事務補佐 池田、杉原

|| 団委員会 || 四月二六日 出席者十二名

一、内藤新団委員長紹介

一、新団委員決定、紹介

|| 団会議 || 五月十日 出席者十四名

一、各隊報告

一、団委員会への希望

|| 団委員会 || 五月十七日 出席者十四名

一、団委員会での役割分担決定

|| 合同リーダー会 || 五月十七日

一、リーダー研修会について

|| 団委員会 || 六月二一日

|| 団会議 || 出席者リーダー十三名

団委員 九名

一、各隊キャンプ予定報告

年少隊舎営 七月二一日〜二四日

少年隊野営 七月三一日〜八月五日

年長隊野営 七月二一日〜二七日

リーダー紹介

ボーイ 千代晴康 副長補 辻副長の友

遠で、現在慶応大学在学中

カブ 松田 武明 副長補

原 真知子 副長補

長谷川 泉 副長補

丸山 和子 副長補

西家 一組デンマザー

八代 二組デンマザー

岩崎 三組デンマザー

久保 四組デンマザー

人専往来

○故田中先生へ日本連盟より「かつこう章」が授与されました。

○先日から、スカウティングを続けたい為、ミスタ・クーパーが四団に来訪、日本のフジ章に相当するクープルスカウト章を持っていきます。アメリカで、リーダーとして活躍されていました。

○ボーイスカウト柳隊長のお母様がお亡くなりになられ、六月八日(日)、靈南坂教会で葬儀が行われました。

年少隊十五周年

記念式典御案内

六月二十九日(日)午後二時～五時

場所は教会の階下講 及礼拝堂です。

皆さんノ是非御出席下さい。

バザーの御案内

六月二十八日(土)十一時～四時三十分

楽しい教会のバザーです。

おいしい食堂、もりもり食べて体力作り
皆様の献品やきれいでかわいい手芸品の
数々、その他すてきなものがたくさんあ
ります。

さあ、皆さんノ是非いらっしやって下さ
い。たくさんお友達を連れてきて下さい。

投稿 歓迎

スマイルでは、皆様方の原稿を心からお
待ちしています。スカウト、リーダーはも
とより、御父兄の皆様は投稿は大歓迎です。
どうぞふるって御応募下さいノ。

編集後記

ねばりにねばり、まことにまった遠山さん
からの原稿をいただいた時のうれしかった
こと、次回からはこの手にかぎると思わず
ニヤリ、次は一体誰でしょう?

今回は特にカブスカウトが十五周年にあ
たりますので、特集的な編集をいたしました。
十五年、山あり川あり嵐あり、晴れわ
たった秋の空もあったことでしよう。なが
いですよね——。十五年間。

これからはキャンプのシーズンにはいり
ます。それぞれの隊で色々準備がなされて
いることでしょう。どうぞ元氣よく、楽し
い充実したキャンプ生活を送って下さい。
お帰りになりましたら、スマイルの原稿が
待っています。一に押して二に押して三に
押して——。

又今日も雨、と思つて長ぐつ、レインコ
ート、かさと用意はOK、いそいそ目的地
まで向かつてついたとたん、雨はあがつて
空はきれいにすみわたっていました。

スマイル 第九十二号

発行日 昭和四十四年六月二十八日

編集人 杉原正

発行所 港区赤坂一―一三一六

日本ボーイスカウト東京四団